Dialog

Vol.164

世田谷区民合唱団会報

2023－4
2023.11.8

第 31 回定期演奏会が開催されました

2023 年 10 月 1 日（日曜日）玉川せせらぎホールにて無事に開催できましたことを大変うれしく思います。前日のゲネプロ迄の準備も紆余曲折がありました。初めて利用するホールであり、様々な問題を委員会で議論致しました。最終的に皆様のご協力もあり成功させることができたと思います。ここに先生方、団員の皆様をはじめ、ご協力頂きましたすべての皆様に感謝申し上げます。

第一ステージはヴィヴァルディ「グローリア」を坂本先生の指揮、西谷先生のピアノで演奏しました。第二ステージは北原白秋作詩、信長貴富作曲の「赤い鳥小鳥」を杉山先生の指揮、尾島先生のピアノで演奏しました。お二人のピアニストの素晴らしい連弾を挟み、演奏終盤で団員登場となる演出で、第三ステージはドイツ・ロマン派三曲を坂本先生の指揮、尾島先生のピアノで演奏しました。圧巻は嵐田先生、松田先生、杉山先生の参加で演奏されたアンコール曲の「鷺草讃歌」でした。昨年亡くなられた初代音楽監督の坂本博士先生を偲ぶ企画でした。定演を締める素晴らしい演奏だったと思います。

創立35周年コンサートを終えて

音楽監督　坂本秀明

皆様、本当におつかれ様でした。

第1ステージ「グローリア」の出だしのフォルテが決まり、見た目以上に(笑)若々しい声にお客様もびっくりしたのではないでしょうか。そして、スタッカートや、クレッシェンド、デクレッシェンドも、練習通りに表現してくださり、とても楽しく指揮をすることができました。ソロの嵐田先生、ゲストの松平さん、ピアノの西谷先生、それぞれが、心ひとつにバロック音楽の魅力を引き出してくださいました。

第2ステージ「赤い鳥小鳥」は、舞台袖のモニターで視聴しました。演奏途中に咳をしてしまったり、ソプラノ･パートでフライングしてしまったりの多少のミスはありましたが、全体としては、お客様の郷愁を誘う、いい演奏だったと思います。これも杉山先生のていねいな御指導のおかげと思っております。感謝いたします。

そして第3ステージ。ヨハン・シュトラウスの「春の声」の連弾に乗って颯爽と現れた皆さん。お客様は、これから何が始まるんだろうと思わせておいてのア・カッペラ「おお雲雀」。暗譜の成果が実りG-durで始まり、G-durで終わりました。ドイツ語の暗譜はさぞかし大変だったと思いますが、「第九」の前哨戦でもありますので、敢えて暗譜といたしました。「流浪の民」と「美しく青きドナウ」は、日本語をお客様に伝えるということをモットーに練習を重ねてまいりましたが、その成果を皆さんが発揮してくださり、メリハリのあるいい演奏だったと思います。尾島先生、西谷先生、フル・オーケストラのような響きで盛り上げてくださいました。

アンコールは、出演者全員による「鷺草讃歌」。全員の心がひとつになっての演奏でした。本当にありがとうございました。

ヴォイストレーナー　嵐田　美穂

この度は創立 35 周年記念コンサート、定期演奏会のご盛会誠におめでとうございます！

また、私の演奏したい音楽に寄り添い指揮をしていただいた坂本先生、軽やかで温かい音色で支えてくださった西谷先生に感謝申し上げます。お二方の目指す音楽に行き着くにはまだまだ未熟者ですが、今の私にできる演奏を音高時代から憧れの先生方とご一緒でき幸せでした。また大学同期の松平さんとのデュエットもとても楽しかったです。

そして何より、いつもヴォイストレーナーとしてご一緒させていただいている皆様と同じ舞台に立てましたこと、本当に幸せに思います。舞台裏で「Gloria」の第一声を聴いた時、輝かしい歌声に感動しました。また、それぞれ性格の違う三曲を見事に歌いこなしていて聴き応えのあるプログラムも楽しかったです。「赤い鳥小鳥」では、杉山先生の目指す柔らかで朗らかな世界観を皆さんの歌声でよく表現されていました。尾島先生の繊細で美しい音色とみなさんの声が混ざり合って舞台裏で、日本人で良かったなぁと感慨にふけっていました。

「春の声」のピアニストお二方の演奏そして途中から皆さんが入場してくる演出は、耳にも目にも華やかで、日本の世界から一気にヨーロッパの世界へと誘ってくださいました。ロマン派三曲も、坂本先生の上品でよく構築された世界観を表現しようとみなさんの集中力も素晴らしく難曲ばかりでしたが、しっかりくらいついており、さすが世田谷区民合唱団の皆さんだなぁと身内ながら誇らしく思いました。

アンコールでは、坂本博士先生作曲の「鷺草讃歌」を皆様と一緒に歌えて、舞台、客席全てが何か不思議な力に支えられてこの定期演奏会の盛会をお祝いしてくださっているような気持ちになりました。博士先生も、きっと天国で見守りながらお聴きくださったのかなと思います。今回ソリストとして世田谷区民合唱団の皆様とご一緒できましたこと、私にとって大きな糧となりました。今後も微力ながら、皆さまの歌声生活に少しでも寄り添えるよう精進致します。引き続きどうぞ宜しくお願い致します。

定期演奏会を終えて

ピアニスト　西谷　幸子

35 周年定期演奏会を無事に迎えられ、成功裏に終了されましたこと、心よりお祝い申し上げます。

猛暑も過ぎ去り、秋の気配も感じられた演奏会当日となりました。昨年に引き続き演奏させていただきましたが、今年は以前の「普通の舞台」となり、とても感慨深いものでした。また、バラエティに富んだ、しっかり構成されたプログラムでお客様も楽しく聴いていただけたのではないでしょうか。

「グローリア」においては、毎回の練習で、団員の方々の奏でるハーモニーとピアノとの調和を考え、音色や強弱など工夫することが楽しく充実した時間でした。本番では全ての要素が満たされ、素晴らしい演奏でした。私自身、スキルアップできた貴重な体験となりました。

「赤い鳥小鳥」は舞台上で、大変繊細でやわらかな響きを間近で聴かせていただきました。

最後の連弾からの 3 曲は、とても躍動感のある演奏で、「春の声」の皆様の登場は知らず知らずのうちに笑顔で弾いておりました。

団の皆様には大変お世話になり、またお気遣いをいただき感謝申し上げます。この舞台で皆様とご一緒できましたことは、大変幸せで思い出に残る演奏会となりました。ありがとうございました。

ピアニスト　尾島　紫穂

先日の定期演奏会、お疲れさまでした。プログラムのボリュームとそのハードさに、最初は驚きと、それからちょこっと心配もありましたが、本番当日最後までフルパワーで歌われる皆さまの歌声に、感動いたしました。

ご一緒させていただいた「赤い鳥小鳥」、複雑な音程や分かりにくい拍子感、リズムなどもあり、苦労された方もいらっしゃったのではないでしょうか？(ピアノ伴奏もかなり難しく、私も手こずりながら練習していました。)テクニック的なことや発声など、歌唱面での問題も色々とあるのだとは思いますが、私が個人的に嬉しかったのは、当日変えてみたピアノでの表現を皆さまが敏感に汲み取って、それに応えるように歌ってくださったように感じたことでした。ゲネプロの時、「この道」は、もう少し穏やかに優しく、回顧するような雰囲気にしたいと杉山先生がお話してくださいました。当日ぶっつけにはなりますが、ピアノ前奏の表現を変えてみたところ、その雰囲気を多くの団員さんが察知し、しっとりと素敵な音楽で返してくださいました。おそらく意識や思考の枠を超えて、無意識的に感じてくださった方もいらっしゃるのではと思うのですが、私にとってはそんなアンサンブルこそが、音楽

をやる上で一番嬉しいことでした。タイミングやテンポ感などを合わせることはもちろんなのですが、こういったコミュニケーションを大事にしていたいなと、あらためて感じます。
　このあとは「第九」という大曲が控えていますが、また本番に向けてどんどん変化していく皆さまの歌を楽しみにしております。

メゾソプラノ　ソリスト　松平　幸

　ゆっくりみなさんとお話しする機会もありませんでしたが、こちらにて筆を取らせて頂けること、嬉しいです！ご挨拶遅れました、松平幸（まつだいらさち）と申します。全体的にどすーんとしていましたが、今回実は宗教曲はソリストデビューでした。
　大学の同期だった嵐田美穂ちゃんと出会ったのは、ちょうど 11 年前でしたでしょうか。当時の彼女も今と変わらず、裏表のない、のほほんとしている、しかしパワフルで思いやり深いうたを歌う美穂ちゃんでした。10 年ぶりに共演させて頂きましたが、知ってる声だけど、明らかに成熟され、洗練された声。二人で練習などもしましたが、過去とはまた違った次元で音楽ができる幸せな時間でした。
　ヴィヴァルディの「グローリア」では合唱団の皆さんとコール and レスポンスというところもあり、さてさて、どう絡みあっていこうかと思っていました。リハーサルではその辺りを模索しつつ望みましたが、うわあ、すごい。
　本番では、みなさんに背中を押して頂けるような感覚でした。うわあ、すごい！パワー、エネルギー！！ぐわあああーっと来るんですね。（語彙力）これが音楽で背中を押してもらえるってことか！と感じました。うわあ、すごい！
　すると、私に入ってくる呼吸が違うんです。

　うわあ、すごいなあ。

　ありがたいなあ。
　贅沢な呼吸させてもらえたなあ。

　生まれて初めての感覚でした。本当に歌って一人で歌ってるんですけど、一人で歌ってないんですよね。一人では歌えないんです。家族や友人、自分の先生たち、本当に色んな人に支えてもらってやっと歌えるんです。
　みなさんの生命力、エネルギーが私の体に入って、それが私を通して歌になるような感覚でした。これは、滅多に味わえるもんじゃないぞ！！！と今更のように思います。
　暖かく迎えてくださった、坂本先生、杉山先生、ピアニストの西谷先生、尾島先生、世田谷区民合唱団のみなさん、本当にありがとうございました。ここで、ソリストデビューさせて頂き、本当に贅沢な時間を過ごさせて頂きました。また一緒に歌える日を夢見て！

S33　田辺　聖子

今回、定期演奏会に初めて参加させていただきました。今年の６月に世田谷区民合唱団に入団して４カ月間、練習に参加してきましたが、最初はドイツ語が難しくできるかなと不安もありました。練習では周りの人たちの歌声を聞きながら音取りをしたり、家ではYouTubeを聞くなどして、だんだん歌えるようになると楽しくなってきました。演奏会という目標があるとモチベーションも上がるのでよかったです。

演奏会の本番では、咳がでないように、フライングをしないように、入退場でスカートの裾を踏まないように等々、気をつけなければと緊張していましたが、舞台の上に立って歌い始めてしまえば緊張もなくなりました。ソロの方々の歌声に聴きほれる余裕もできました。演奏会を楽しく終えられたのも、指導してくださった先生方、ピアニストの方々、合唱団の皆さまのおかげです。ありがとうございました。次の「第九」は高音が多いので、高音と大きな声が出せるようになりたいと思っています。これからも練習に参加して頑張りたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

定期演奏会を終えて

S37　野田　玲子

2023年10月1日午後5時頃、35周年定期演奏会が『鷲草讃歌』で幕を閉じた。まず一言で今の気持ちを言わせていただくなら「楽しかったぁ‼」

慣れ親しんだ曲が多く、しっかり指揮者を見ながら歌えたこと。そしてマスク無しで声を思い切り出せたこと。この２つの喜びは大きい。

私にとっての合唱の醍醐味は、音の重なりを楽しめること。低音から高音までの縦の線での和音が、呼吸もぴったり合って一つの音のように聞こえながら響き合った時の喜び、だ。

当日、ヴィヴァルディで私にしては珍しくテナーの横に立つことができた。他のパートをしっかり聞き、曲の流れをすべて把握しながらソプラノの務めを果たす。音の重厚感を感じながら歌を楽しむことができた。背の高い私は、たいていの場合、後ろの一番端に立つことが多いので、他のパートの音が聞こえにくかったり、私自身に余裕がなく楽譜にかじりつきで他のパートに耳を傾ける余裕がなかったりで、どちらかといえば自分一人で歌っている感が大きいことが多い。隣りで違う音を出してくれる、違うところで入ってくる、等を隣りで感じることができるのはなんて楽しいのだろう！今日はそれを実感することができた。

改めて日本の懐かしい歌をメドレーのようにして歌うのも味わい深いものだった。定演以来、♪この道～は、いつか来た。。。♫　とか、ピッチピッチピッチ（リズムに気を付けて!笑）♫なんていうフレーズが、時折り頭の中で踊っている。

歳とともに、しばらく間が空くと先生方のご注意がすっかり頭の中から消えてしまい、何度も同じ注意をされる。あ！と気づいた時には指揮棒が止まっている。先生方には忍耐の連続だったことと思う。怒鳴りたい気持ちを抑えてジョークに変えて繰り

返しにこやかにご指摘いただいたことに深く感謝している。音楽の厳しさと深さと喜び（他にも沢山のこと）をいつも教えていただき、導いていただけることを大変嬉しく思っていることをお伝えしたい。

A01　秋山　洋子

歌との出会いは中学、高校時代の聖歌隊です。朝の礼拝、昼休み、放課後の練習と一日中歌と共にありました。練習帰りに皆で歌った美しいハーモニーに心震えたことは今でも忘れられません。

その後、PTA のママさんコーラス、バッハより 100 年前に活躍したハインリッヒ・シュッツの曲を歌う団体で歌いました。宗教曲が好きで、いくつかの団体に属しました。

約 15 年前に「第九」が歌いたくて世田谷区民合唱団に入団しました。それまで小さな合唱団しか知らなかった私は、団員数の多さ、指導陣の手厚さ、役員さんの活躍に驚きました。ウィーンやオーストラリアへの演奏旅行での、現地の方々との交流は有意義で楽しかったです。

今回の定期演奏会も、ヴィヴァルディ「グローリア」、北原白秋童謡歌集「赤い鳥小鳥」、ドイツ・ロマン派の名曲と多彩な曲を楽しく歌うことができました。今では歌は私の生活に無くてはならない存在となりました。これからも、体を整え、いつまでも楽しく歌えることを願います。

A27　名倉　由美子

初めて合唱団という大きな集団に所属し歌わせて頂きました。

私は、日本語以外の歌が苦手で、ちゃんと歌えるのかとても不安でした。また私が入れて頂いた 4 月には、もう皆さんちゃんと歌われていてドキドキものでした。回を重ねるうちに少しずつ慣れていき、何とか私でも声を出して歌えるようになっていきました。しかし途中で、長年兄妹と一緒に介護していた母が最期を迎えたり、またついにコロナに罹ってしまったりとお休みする事も度々ありました。

何とか 10 月 1 日の定演は無事に迎える事が出来ました。練習してもまだまだのこんな私でも参加していいのか最後まで迷いました。

そして当日、出させて頂いて良かった！というのが、終わった後の感想です。第 1 ステージは 5 列目、第 2 ステージは 4 列目と後ろなので観客からは見えないと思っていたのですが、4 列目と 5 列目には壇がありとっても良く見えました。指揮をして下さる坂本先生、杉山先生のお顔もとても良く見えて、気持ちよく一生懸命に歌うことが出来ました。また、暗譜した曲は指揮して下さる先生に合わせて歌うことが出来ることも学びました。幸せな気持ちで帰りました。でも今は、もう次の歌ったことのない「第九」が不安でいっぱいです。

A32　三嶋　栄子

今年の 3 月に入団したので、初めての定期演奏会でした。練習は頑張りましたが、暗譜はとても心配でした。

「おお雲雀」は慣れないドイツ語と曲が早いので正しい発音が出来なかったと思います。

本番前はドキドキして緊張しましたが、皆さんと一緒に歌うから大丈夫と自分を励ましました。全曲歌い終わった時はとても気持ちが良かったです。

これからも頑張りますので、よろしくお願い致します

第３１回定期演奏会に参加して

T08　末永 裕一

今回が初めて定期演奏会となり、緊張気味の中で本演を迎えた。第 1 ステージの「Gloria」はイエスの誕生を祝う天使たちの歌で、神の栄光への賛歌、神への感謝、地の人々への平和の祈りなどが 1～12 番の曲に表現されていることを知った。演奏では、各パートの歌声、ソプラノの天に届くような鮮烈な響き、メゾソプラノの艶やかで甘美な声が、独唱、二重唱、混声四重唱とさまざまな形で重なり合い、色合いや厚みを変えるこの曲の美しさと深さに引き込まれ、高揚感を味わった。また作曲家はこの曲の中の一つ一つの断面を、どのような場面や情景を想いながら描いたのか、興味は尽きない。

第２ステージの「赤い鳥小鳥」は、多くの日本人が子供の頃耳にした、心の琴線に触れる詩とメロディーがメドレー風に編曲された作品であった。広い音域の中を流れるピアノの音色、静寂の中で刻まれる鍵盤の音と共に四パートの歌声が溶け合い、それに詩の言葉が乗り、美しく抒情的な空気に会場が包まれた。私自身、子供の頃の様々な情景や母との思い出などが浮かんできて心に熱いものを感じた。

第３ステージのドイツ・ロマン派の合唱曲三曲は、合唱の醍醐味を存分に発揮できる作品であった。暗唱で指揮の振りに意識を集中させ、強弱、レガート、間など、半年間に亘る練習の集大成が発揮できるように歌に気持ちを込めた。ドイツ語歌詞での華やかさを響かせ、流浪の民の神秘的な動き・心情やドナウ川を船で下る楽しさと優雅さを表現できるよう歌い上げ、最後に満場の拍手をいただいた。

今回の演奏会、曲調の異なる変化に富んだ三部構成それぞれで、合唱や演奏の持つ魅力を観客の皆様に感じていただけたら幸いである。

これまで合唱団と真正面から向き合い、粘り強く懇切丁寧なご指導に当たっていただいた坂本先生、杉山先生、ピアノの巧みな技術で合唱を支え皆に感動を与えて下さった西谷先生、尾島先生、そして合唱指導と美しい歌声を披露していただいた嵐田先生には本当に感謝し尽くせない思いであり、心より御礼申し上げます。本当に有難うございました。

T13　水谷　利明

第 31 回定期演奏会！温かい拍手と共に無事終演でき何よりでした！

【一安心】

私にとって、コロナ禍前に演ったジャズ・ライブ以来 4 年ぶりのステージとなり、久しぶりの緊張感を楽しめました。門外漢だった合唱をなんとかこなすことができ一安心です。坂本先生、杉山先生はじめご指導・演奏頂きました先生方、運営関係者皆様に感謝でございます！

また、リハ・本番を通じサポート頂いた前後左右の団員皆様、大変お世話になりました！

【食わず嫌いを克服？】

プロアマ問わず相当数のコンサートに足を運び、様々な分野の音楽に親しんで来ましたが、唯一合唱は関心がなく、“お行儀”にうるさい退屈ジャンルという先入観がありました。ところが、入団以来楽曲に触れ、本ステージを終えてみると劣らぬ魅力を感じられるようになりました。

特に「Gloria」には、コンチェルトとは違った Vivaldi の奥深さを感じます。もっとも、Gloria in excelsis Deo は、Piccolo Trumpet が活躍する有名曲なので興味はありましたが、、、

【定演までの道のり】

視覚事情により楽譜が朧げにしか見えておりませんので、様々な工夫を凝らしてみました。まず、歌詞だけの譜面を Font 26 で別途作り、フレーズ毎に覚えることとし、オリジナル譜の歌詞フレーズの最初数文字を大きな文字でハイライトしておきました、、、、プロンプター代わりです。

また、歌詞の意味や人称変化をイメージ映像に置き換えてみました。音符は音源で自習しつつ、リハでは近くでキーになる方の歌唱を耳コピペさせて頂きました。お叱りを受けそうですが何卒ご慈悲を！

【反省点】

正確な発音、音程で言葉を載せ、Einsatz や音色を合わせていくのには苦労しました。妙にドライブして突っ込まないよう、長い音符ではフラットしないよう、自分に言い聞かせながら歌うつもりでしたが、なかなか。

また、リハ中に何回も指摘されましたが、全体的に硬い表情だったような😤次回はもう少し柔らかな表情で歌いたく思います😊

引き続き宜しくお願いいたします！

久しぶりに参加の定演、楽しかったです♪

B08　徳尾　和彦

「Gloria」の歌い出しが成功の鍵との坂本先生の檄に全員が集中した。結果、坂本先生の良し！といった安堵の表情を見てホッとしたし、それ以降肩の力が自然と抜け歌いやすくなったことをまず思い出します。定演の評価は 10 月 4 日練習前の坂本先生のコメントのとおりだが、杉山先生の心底はハラハラであったであろう。指揮される歌の情感をこめた表情に引き込まれて歌いました。選曲は色合い豊かで良かったです。

歌への（勝手な）雑感・・・

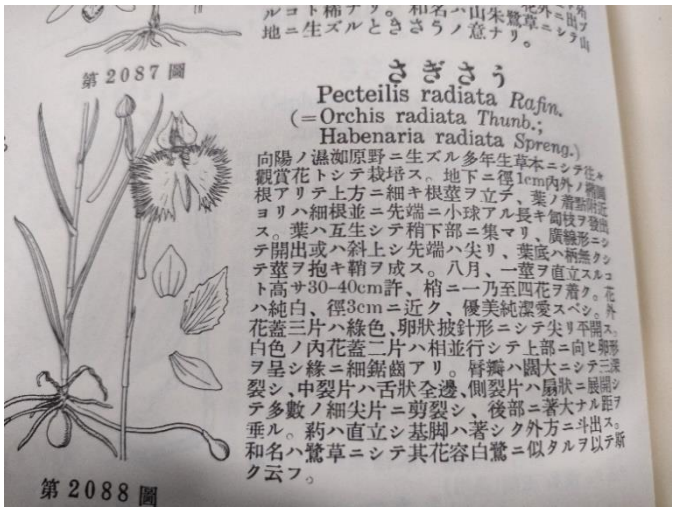
「グローリア」美しい歌だ。神よ、主よ、現在の世界を鎮めて欲しい。

「揺籠のうた」(「赤い鳥小鳥」第１章小さないのち）では大人の男の優しさをと言われた。そうだ、孫たちにもこの気持ちで接しよう！

「流浪の民」では、現在も増え続ける難民の心情を思い起こさせた。

「蒼きドナウ」は黒海に注いでおり、今やウクライナの穀物輸送の迂回路となっている現状を憂いつつ、歌詞にある姿に戻って欲しい。

「鷺草讃歌」かつてベランダで育てたことがある。世田谷区には、鷺草に絡んだ昔話も残っている（Wikipedia)。写真は牧野富太郎博士「牧野日本植物圖鑑」(1940 年) P.696 より図書館でコピー。ラン科。



個人的には 4 月から復団して、その前の数年のブランクもあり出遅れ感があったが、何とか終えることが出来て合唱の楽しさを改めて感じた演奏会でした。

辛抱強く（同じことを何回も）指導くださった坂本先生、杉山先生、有難うございました。

それを支えてくださった西谷先生、尾島先生、お二人のピアニスト。「春の声」連弾は会場、我々を優雅な雰囲気に包んでくださいました。ソリスト嵐田先生、松平先生のさすがの歌声、聴き惚れてしまいずっと聴いていたかった。コロナ禍を超えて演奏会の企画から運営まできめ細かく取り組んでいただいた役員の皆様に感謝します。そして狭い舞台袖での団員配列、譜面管理方法は見事でした。

第 31 回定期演奏会を終えて

B16　山田　耕二

物資両面で多大な後援を頂いた世田谷区、痒いところにまで手の届く指導を頂いた坂本・杉山両指揮者、聴き惚れるほどに素晴らしい演奏の西谷・尾島両ピアニスト、さすがプロ声楽家と思わせる嵐田・松平両ソリスト及び今日まで陰日向なく努力を頂いた運営委員会の各委員方にお礼を申し上げます。

まず、演奏委員として男声のブレザーの今後の調達です。退団された団員からの寄贈ブレザーのストックが今年でついになくなり、このブレザーは 10 年前に生産を既に終了しているために、新年度からは新規に購入しなければなりませんが、現在ブレザーを貸与されている方との金銭的なバランスをどう取るかが問題となります。

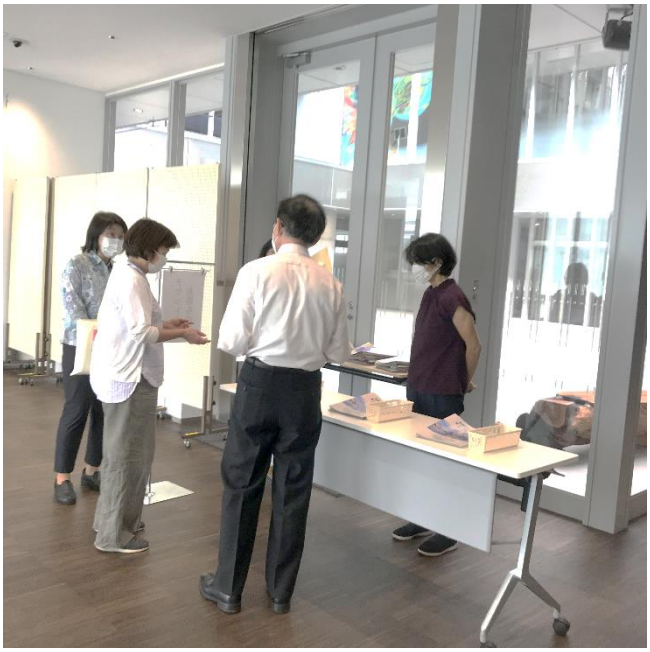
次に、練習会場への交通手段です。等々力、烏山、成城ともに昔は電動自転車で通っていましたが、老化、交通の危険性から最寄り駅までは自転車で行き、その後は鉄道を利用しています。等々力の場合は自転車で新桜町まで 15 分かけて出て、有料駐輪場に預けました。今年は幸い雨の日が少なかったので自転車の利用が可能でしたが、雨が降れば用賀までバスを利用する必要があります。それもあり今回は家族を招待することを断念し、今回の聴衆の少なかった責任の一端を感じました。

最後に、ヴィヴァルディの「グローリア」では、3 曲目の G から 4 曲目の E の音取りで、G-dur ですのでドからラの音をとること、8 曲目の D-moll の A をミと感じて 9 曲目の A の音を取ること及びこれに続く 7 小節の音の進行が難しくて苦労しました。「赤い鳥小鳥」では、「アメフリ」（第 2 楽章子供の村）の最後の G の音から「かえろかえろと」（同）の 4 オクターブも低い A の音をとることに苦労し、「砂山」（同）のベースの出だしの下の D の音は、今までに経験した最も低い音で響きませんでした。「この道」（第 3 楽章いつか来た道）の p.38 の 29 小節からの指揮の分け振り後の riten.から Tempo Ⅰの Alto の「A--いつか来たみち」の箇所は指揮をしっかり見て、非常に注意して歌いました。ドイツ・ロマン派の名曲では暗譜に苦労し、ドイツ語の「おお雲雀」は何とかなりましたが、日本語の古語を含んだ「流浪の民」は、うろ覚えで所々で歌詞を間違えました。

編集後記

今回ご出演いただきましたメゾソプラノソリストの松平先生にコメントを頂けました。大変素敵な感想で、その時の感動が思わず蘇るような気がしてうれしくなりました。松平先生と舞台でご一緒させていただきましたことは合唱団にとっても素晴らしい経験、記憶の財産となります。本当にありがとうございました。先生の今後の益々のご活躍とご多幸を団員一同心よりお祈り申し上げます。

新型コロナが季節性インフルエンザと同等な“５類感染症”と分類されても、まだ後遺症などで苦しむ患者が報告されています。そんな不安な中、3 ステージの楽曲の練習をするため練習場所に足を運ばれ、励まれた団員の皆様には満足された定演になったのではないでしょうか。マスクを外せない練習はやはり何か、どこか未消化でした。

本番ではマスクを外すと決定してから、心配も完全には消えませんでしたね。でも世田谷区民合唱団の素晴らしいところは本番に強いところです。再度証明するかのようなステージになったのではないでしょうか。ご指導くださった先生方、ピアニストの先生方に本当に感謝申し上げます。また裏方で孤軍奮闘された役員の力もここにお伝えしておきます。皆様本当にお疲れ様でした。記：柴田

2023 年 9 月 30 日（土曜日）ゲネプロ